



有斐閣選書

俳句のすすめ

古典と現代の
詩精神をつなぐ

井本農一
川崎展宏
堀信夫 編



俳句のすすめ

古典と現代の
詩精神をつなぐ

井本農一・川崎展宏・堀信夫編



有斐閣
選書

俳句のすすめ

＜有斐閣選書＞

昭和 51 年 1 月 15 日 初版第 1 刷発行
昭和 55 年 3 月 30 日 初版第 8 刷発行 ￥1,100



	井	本	農	一
編 者	川	崎	展	宏
	堀		信	夫
発 行 者	江	草	忠	允
発 行 所	株	有	斐	閣
	式			
	会			
	社			

東京都千代田区神田神保町 2～17
電 話 東 京 (264) 1311 (大代表)
郵便番号 [101] 板橋口座東京 6-370 番
本郷支店 [113] 文京区東京大学正門前
京都支店 [606] 左京区田中門前町44

印刷 堀内印刷・製本 稲村製本

© 1976, 井本農一・川崎展宏・堀信夫。

Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

1392-081091-8611

は し が き

大変な俳句ブームだそうである。俳句への関心が今日ほど高まったことはないといわれている。

小さなきっかけで文字を並べてみると、俳句のようなものができる。それでも自分の表現である。

やがて、年齢・職業・性別に関係なく仲間ができる。そんなところに俳句が広く親しまれる根本の理由があるのである。

近代俳句の道を拓いた子規は、西洋画のスケッチを俳句の方法に導入して「写生」ということをいった。自然を借りて教訓を述べたり、古い美意識にもたれることをしないで、直接対象に向かうように説いたのである。以後、写生は、自然の一端を写して大自然の姿を現わすことができる多くの人に受け取られてきた。そこからまた、修練によっては、わずかな言葉で深い思想も表現できるようになっている。

しかし、自然の一端を写すといっても、作り手の心が動いて言葉を選択するので、適切な言葉を欠けば読み手の心は動かないし、大自然など現われはしない。孤独な心で詠んだつもりが、相手を退屈させることもしばしばである。短詩型は言葉が少ないから入りやすいようだが、少ない言葉同士の関係は微妙だから、句を作るのは、実は、張りつめた作業である。

わずかな言葉で深い思想が表わせるなどと、作り手は考えない方がよい。俳句は、そこに置かれた言葉以上でもなければ、言葉以下でもない。どんな思い入れも、思い入れだけでは通用しない場なのである。

俳句の厳しさを知るには——厳しさに徹するところに本当の楽しさがあるのだが——すぐれた鑑賞に接するのが第一であろう。

第一部「俳句の鑑賞」は、広い範囲の作家に鑑賞の筆を執っていただいた。すでに大家・長老と目される方々が、新進の若手と肩を並べて執筆して下さっている。病を押して稿を寄せられた作家もおられる。感謝にたえない。熟練の指導者をお願いした「表現と推敲」の項と合わせてご味読いただきたい。

ところで、子規以後誰でも使っている俳句という言葉の「俳」の字は、近代に先立ち、四百年を越える俳諧の歴史を負っている。俳句における伝統とは何か。伝統は現代俳句に何を示唆しているのか。そうした問題意識をもって企画されたのが第二部「古典に学ぶ」である。気鋭の学究に各項目にわたり、最新の成果を披瀝していただいた。ご期待に副えるものと思う。

第三部は、詩人も交えて、知名の作家に「俳句との出会い」を語っていただくことができた。「俳句の基礎知識」「俳句の歴史」を合わせて、やや部厚い本書を充分ご活用いただければ幸いである。

編集は、入門書として視野を広く、水準を高く、ことばをやさしくとの井本の方針に沿い、堀と川崎が古典・現代をそれぞれ分担、連絡を保ちながら仕事を進めて来た。

執筆を快くお引受け下さった筆者の方々に改めて心より御礼申し上げます。（文責 川崎）

昭和五十年十月一日

編 者

目次

第1部 俳句の鑑賞——近代・現代の秀句に学ぶ……………1

1 空のうきき……………大野 林 火……………3

2 暦……………細 見 綾 子……………9

3 山・海・川（その一）……………清 崎 敏 郎……………14

4 山・海・川（その二）……………榎 本 冬 一 郎……………20

5 草・木（その一）……………草 間 時 彦……………26

6 草・木（その二）……………宇 佐 美 魚 目……………32

7 鳥・獣……………三 橋 敏 雄……………38



17	16	15	14	13	12	11	10	9	8
酒	旅	遊 戯	祭	働く(その三)ーサラリーマン	働く(その二)ー工場・鉱山等	働く(その一)ー耕す・漁る	着る・住む	食 べる こ と・飲 む こ と	虫・魚
石 川 桂 郎	上 村 占 魚	柴 田 白 葉 女	飯 島 晴 子	林 翔	古 沢 太 穂	木 村 蕪 城	上 野 さ ち 子	中 島 斌 雄	鷹 羽 狩 行
98	92	86	80	74	69	63	57	50	44



.....

第3部 俳句との出会い……………

2 時 雨 〈伝統と変革〉

堀 切 実 167

3 五月雨 〈本意と写生〉

久保田 淳 180

4 雪 〈風狂と清貧〉

堀 信 夫 193

5 月 〈名所と旅〉

横 井 博 206

6 花 〈清遊と自由〉

西 垣 脩 220

■ 初心の動機

阿波野青畝 235

■ 「鬼の詞」の作句者たち

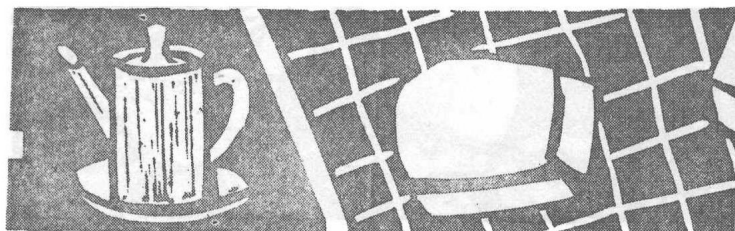
大 岡 信 236

■ 私の場合

加藤 楸 邨 238

■ 俳句になじむ

高 浜 年 尾 241



第4部 俳句の基礎知識

その一 作句の基本

川崎展宏・松崎 豊

■俳句との出会い

富安風生

243

■俳壇は乱世の時代だった

三 谷 昭

245

■私を生かした人々

山 口 誓 子

248

■開眼は蕪村から

山 口 青 邨

250

1 定型と自由律

255

2 季語と切字

259

3 写生と構成

263

4 韻律について

267

253



5 歳時記

その二 表現と推敲

1

秋元不死男

272

2

安住敦

276

3

森澄雄

281

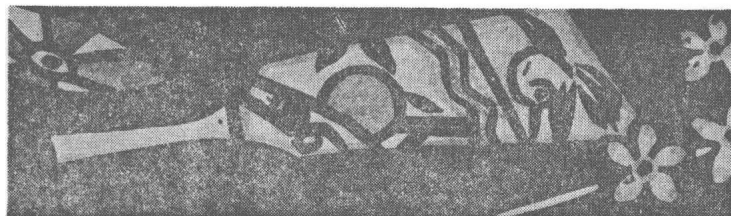
第5部 俳句の歴史

井本農一

287

■ 木版画カット
■ カット

恩田秋夫
鵜森阿久



第 1 部

俳句の鑑賞

——近代・現代の秀句に学ぶ——



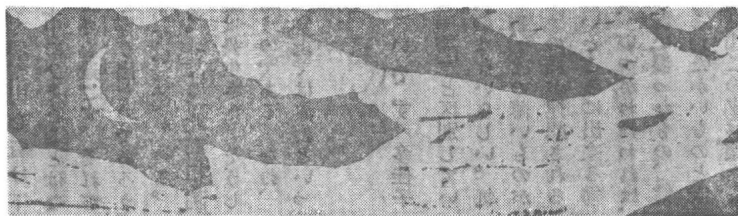
1	空のうごき	大野 林火	9	食べること・飲むこと	中島 斌雄	18	都市	桜井 博道
2	暦	細見 綾子	10	着る・住む	上野さち子	19	田園	福田甲子雄
3	山・海・川 (その二)	清崎 敏郎	11	働く(その二)	木村 蕪城	20	学園	鈴山 実
4	山・海・川 (その二)	榎本冬一郎	12	働く(その二)	古沢 太穂	21	人生	阿部 完市
5	草・木 (その二)	草間 時彦	13	働く(その三)	林 翔	22	愛	鈴木 詮子
6	草・木 (その二)	宇佐美魚目	14	祭	飯島 晴子	23	生と死	飯田 龍太
7	鳥・獣	三橋 敏雄	15	遊戯	柴田白葉女	24	戦争と平和	高柳 重信
8	虫・魚	鷹羽 狩行	16	旅	上村 占魚	25	贈答	村山 古郷
			17	酒	石川 桂郎			

1 空のうづき

■大野 林火

夢殿の夢の扉とばしを初日蔽おほつ
 春の雷鯉は苔被て老いにけり
 足袋白く霞の中をなほいでず
 布良めちといふ名も春風の海女の村
 さみだれのあまだればかり浮御堂
 虹見るうちはげしき彩の束となる
 雲の峰静臥の口に飴ほそり
 けふありて銀河をくぐりわかれけり
 蓮の中羽搏つものある良夜かな
 釘打つて今日は遊ぶ子秋風に
 旗のごとなびく冬日をふと見たり
 翠黛の時雨いよいよはなやかに
 落葉松かちまつはいつめさめても雪降りをり

中村草田男
 芝不器男
 橋本多佳子
 富安風生
 阿波野青畝
 山口誓子
 石田波郷
 秋元不死男
 水原秋櫻子
 中村汀女
 高浜虚子
 高野素十
 加藤楸邨



法隆寺にて

夢殿の夢の扉とらを初日蔽おほつ 草田男くさた

「初日」は元日の日の出であり、その日影をもう。新春の瑞祥をこめることがその本意である。初日を拝む風習はいまも広く行われている。あらたまの年のはじめの日の出を拝み、それを全身に浴びることはみそぎと同じで、それによって身を深め、新たな活力を享くることである。作者はその初日を法隆寺東院の金堂夢殿でとらえた。夢殿は二重の石壇上に建ち、単層の八角円堂、四面に両開板扉を設け、他の四面にはれんじ窓がついている。この句、「夢の扉」に無限の夢が託され、未来への夢がふくらむ。勿論、夢殿ということから引出されたのだが、ただの語呂合せではない。「扉」は現実の扉であるとともに「夢の扉」でもある。だから初日が叩くのであり、それで扉はひらかれ、無限の夢がやがて繰りひろげられもするのである。

春の雷鯉は苔被かて老いにけり 不器男ふき

春の雷は初雷ともいわれ、啓蛰けいちくのころ（およそ三月六日）鳴ることが多く、虫出しの雷ともいう。雷鳴を聞いて冬眠中の蟻、蛇、とかげが眼を覚まし、穴を出る

など俳諧の味である。「蛇を追ひて春雷山を駈け下る 瓜人」鯉とて例外でない。土中にひそむことはなににしても水底深く身をひそめて冬を過ごす。それがいま春雷に誘い出されて水面近く浮び出たのであろう。「苔被て」に一冬水底に身をひそめていた姿がある。「老いにけり」に鯉の大きさがある。私は洛北実相院で七十有余歳の鯉を見ているが鯉は長生きだ。そうした鯉なればこそ「苔被て」も似合うのである。なお、春の雷は一つ、二つでやむ。気象学上では界雷といっている。

足袋白く霞の中をなほいでず 多佳子

古来、詩歌では春は「霞」、秋は「霧」と区別しているが、気象学にはかすみという術語はないらしい。気象学では視界一キロ以下のものを霧、霧の薄いものが靄あだという。霞といえは「棚引く」の語が連想されるが、それはきりぐもといわれる低いところに来る霧のような雲だそうである。しかし、いつかわれわれは、霧といえは深く立ちこめて、つめたい湿ったもの、霞といえは、かすかなもの、乾いてあたたかいものと区別している。「ひさかたの天の香久山この夕べ霞たな

びく春立つらしも」(柿本人麻呂歌集)などの名歌を基に詠みつがれた影響であろう。さて、この句、作者は「なほいでず」というが、「いでず」をたのしんでいる。そこが霧でなく霞である。霞の中に女性を置き、その白足袋がちらちらするさまを思えばいよいよ春であろう。なお、夜の霞とはいわず、「朧」というのが普通である。

布良^{ふら}といふ名も春風の海女^{かみづめ}の村 風生

連歌書『至宝抄』(紹巴)に「連歌に本意と申事候。

たとひ春は大風吹、大雨降共、雨も風も物静なるやうに仕候事候」とある。心得置くべきである。春吹く風には昨今気象用語の「春一番」が一般用語にもなってきた。いかにも春を呼ぶといった感じがある。さらに「東風」。春風よりはやや冷たい。「涅槃西風」もどこか冷たい。それに対し、春風は胎動である。すこぶる温和な感じである。仲春、晩春の風趣である。「布良」は安房の一浦曲の名。「めら」という名はやさしいばかりか、どこか、とろりとした語感を持つ。それは春風にふさわしく、「海女の村」にふさわしい。海女たちにも海開きの日が来ているのかも知れない。

さみだれのあまだればかり浮御堂^{うきみだう} 青畝^{あおき}

浮御堂は堅田満月寺にある近江八景の一。湖中に突き出た浮御堂には樋がない。雨だれはぼたぼたとじかに湖中に落ちる。そのため、あまだれに囲まれた浮御堂は湖中に孤立、いよいよ浮御堂となる。作者はこの句につき、現今の浮御堂が永久保存のため、湖中に堂を支えた柱が石材となったのを「がっちりしている感じでは惜しまれる」と嘆くが、私にはそれよりも堅田大橋が目障りだ。しかし、それはそれとして浮御堂をめぐって芦はいまも生い、鳩はしきりに潜り、目をたのしませてくれる。この句は満月寺門前に句碑となっている。

虹見るうちはげしき彩^{いろ}の束となる 誓子

「虹といふ聖なる硝子透きるたり」「いづくにも虹のかげらを拾ひ得ず」も同じ作者の句。虹は外側から赤、橙、黄、緑、青、藍、紫の順に半円形のアーチを描く。俗に「朝虹は雨」「夕虹は晴」といわれていることも作句上の参考となろう。誓子のこれらの句は夢幻的な夢見がちな虹をメカニカルに解明、現代人の感觸でとらえて異色がある。「はげしき彩の束」には七

彩の光りに寄せる嘆声が聞かれる。さらに「聖なる硝子」からは天上の神々の住いも思い浮ぶし、「虹のかけら」からは消え去った虹のかけらがそこらの草むらにひそんでいるのでないかの錯覚をさえ呼び起される。三句、いずれも虹が生んだ美しい詩情である。

雲の峰 静臥の口に 飴ほそり 波郷

陶淵明の詩の「夏雲奇峰多し」は有名である。夏ということに殊更印象づける雲像であろう。地方地方でそれぞれ、坂東太郎、丹波太郎、比古太郎、信濃太郎、石見太郎と愛すべき名称を以て呼ばれているのも、この雲への畏敬の念の現われといってよい。この句は雲の峰の「強」に対し、療養静臥するもの「弱」でとらえられている。夏雲はいよいよ高く立ち昇っていよいよ強、口中の飴はいよいよ細っていよいよ弱といえはさらに分りよからう。作者はこの雲の威から生命の尊厳を知り、勇氣を得たか。弱を強調しながら不思議にからりとしている。

けふありて 銀河をくぐりわかれけり 不死男

私はある本に「春は大地からやってくる」「これは

秋の到来を大気から受けるのと好対照であろう」と書いた。「秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる」という藤原敏行朝臣の歌は有名である。秋こそしみじみと天体のうごきを味わうべきである。

「天の川」も秋を代表するひとつ。作者の自解を抄出すると「今日という日の充実、今日という日の幸福をしみじみ感じてわかれた。頭上には天の川が流れていた。それをくぐり抜けて行くように感じたのは、今日という日がこの上なく親しく、また、生きていることのようにこびがこの上なく幸福に感ぜられたからである」とある。天の川は七夕伝説とともに古来われわれに親しまれている。しかし、そのことを離れても、晴夜、大空を帯状につらぬくこの恒星群は、薄くけふる星群の中に、大きくあらゐる星もきらめいて美しい。「銀漢を仰ぎ疲ること知らず 立子」

蓮の中羽搏つものある良夜かな 秋櫻子

月は古来、詩歌に多く登場する。八月十五夜を「名月」または「月見」とするのは中国の詩歌が輸入されてからであるが、月々の十五日が祭の行われる折目の日であり、ことに陰暦八月は初穂祭であった。芒の穂